偉人「八田與一」に学ぶ

── 小4校外学習～学習発表会へ（総合的な学習の時間）──

前高雄日本人学校　教諭
千葉県千葉市立若松小学校　教諭　高　山　直　樹

キーワード：八田與一，台湾を愛した日本人，学習発表会，総合的な学習の時間，現地理解

1．はじめに

高雄市は人口約150万人。世界十大貿易港の一つであり，マンゴーなど南国に見られるフルーツの豊富な都市で，市の花はオレンジ色が美しい木綿花である。日本からは，2006年より日本アジア航空が直接高雄まで乗り入れ，大変便利になった。また昨年３月に時速300kmの新幹線が開通し，台北市と１時間半で連絡している。

また高雄市は亜熱帯気候に属し，４月頃から30度を越す暑さとなり，10月初旬まで続く。北回帰線の南に位置し，太陽高度も高く，強い直射日光を受ける。しかし湿度が低く風があり，思ったよりも涼しく過ごせる。

高雄日本人学校は小学部校舎と中学部校舎が２棟向かい合っており，小学部６学級129名，中学部３学級55名の計184名が楽しく学んでいる。「世界一あいさつのできる学校」をスローガンに児童生徒，教師そして保護者を巻き込み日々取り組んでいる。

台湾の教育制度は，日本と同じ初等教育６年，中等教育３年，高等教育３年の６・３・３・４年制となっている。公用語は中国語（北京語）だが，最近は従来から存在する台湾語の授業を取り入れている学校が増えてきている。保護者の教育熱は高く，学校から帰ってそのまま塾に直行している子も少なくない。

2．活動の実際

(1) 学習に至る動機

私が，病院に行った時の話である。下手な中国語とジェスチャーを用いて話をしていると，「あんた日本人かい？」と流暢な日本語で声をかけてくださり，その後通訳をしてくれた方がいた。75歳を過ぎたお年寄りの方であった。台湾・高雄に生活していて強く感じることは，台湾の方は日本人に対して，本当に驚くほど「やさしい」ということ。これは，中国や韓国の対日本人への感情に比べると本当に驚く。75歳といえば終戦時小学校の６年生。その時まで日本の統治下におかれていたので日本語が公用語となっていたためだ。しかし，日本統治下となれば，日本人から迫害を受けるなど日本人に対して悪い感情を持っていたとしても，良い感情は持ち合わせていないのではないか。当然そう考えるのが自然だろう。だがここの人たちは違っていた。特に「台湾の北部の方たちより南部のほうがやさしい」という。若い世代からお年寄りまで「日本びいき」なのは一体どうしてだろう。子どもたちとそんな話をしていた。

現在，日本のドラマや流行歌が台湾に流れ込み，若い世代で流行となっている。これが一つの要因にあるが，若い世代の上の40～50代の方たちにも好かれていることが，実は大きな要因となっている。子どもたちからもよく「台湾の人に親切にしてもらったよ」といった声を聞くことがある。日本人というだけでどうしてそんなに親切にいてくれるのだろう。子どもたちの疑問は膨らんでいった。

そして一人の「台湾を愛した日本人」のことを紹介した。日清戦争後から第二次世界大戦終戦までの50年間，日

本の統治下にあり，（「このこともよくわかっていない日本人が増えてきている」という心配が聞こえている）当時金沢市出身の建設技師「八田與一（はったよいち）」が台湾に赴いている。そして子どもたちは，戦争のころ八田與一さんという人が周囲から無理だという反対の声を振り切ってダム建設を成し遂げたことを知った。また，日本が戦争に負けたことによって，当時日本のありとあらゆるものが処分されていったのだが，その中にあって，八田與一の銅像だけは壊されたり取り除かれたりすることがなかった。理由は現地台湾の方たちが，心の底から尊敬し，そして慕っていたからに他ならないということがわかった。当時植民地という中にあり，占領していた日本人のことを嫌うどころか慕い，見つかれば逮捕されてしまうかもしれないにもかかわらず，銅像まで隠していた。そんな驚きの事実を知り，子どもたちの八田與一へのことを知ろうとする大きな動機付けとなっていった。

このようなことがきっかけで「日本人が親切にしてもらっている」ことを知り，総合的な学習の時間でその偉業を学ぶことになった。学習には「台湾を愛した日本人」（古川勝三氏著）と小学４年生くらいにもわかりやすく同書を書き下ろしてくださっている副読本（齋藤博文氏編纂）をもとに学習を進めた。

(2) 活動の流れ

①活動の初期

副読本を一度簡略化した形で読み進めた後，以下の項目でテーマを決めグループごとに学びを深めていった。

＊八田與一の性格　＊偉業の実際　＊八田與一の家族

調べ学習ということでそれぞれのグループでは模造紙にまとめたり，紙芝居のまとめたりとすぐにでもプレゼンテーションができるようなまとめ方になるように進め，クイズや寸劇を考えるようになってきた。

そして，少々の教師からのアプローチはあったが「学習発表会で今回調べたこと・感動したこと・決意として考えを持つことができるようになったこと」をしっかりと表したい，プレゼンテーションしたいと思うようになった。

②プレゼンテーション

一つは劇。副読本からはいくつもの場面が予想されたが，子どもたちの意見で「八田與一がダム工事をするにあたって，ただ工事現場作るということにとどまらず。「良い仕事をするためには家族を呼び寄せなくてはだめだ」との話から，学校を作り，商店を作り…，と最後には一つの町にまでつくってしまった。当時設立した学校は今も残る。そして，周辺の人々の願いとして八田與一を当時の町長のような役職に選んだ場面であった。

次に配役決め。必要となる作業内容の洗い出しとその係を決めた。シナリオは全員で書き，シナリオ係がそれをまとめた。同時に役者はセリフを覚え，「ギャグはどこに入れようか」と練る。また，背景画や小道具の制作もほぼ同時に進行して行った。教師もその準備・シナリオのチェック・衣装の手配と忙しくなった。

さらに，子どもたちは学習内容を歴史の事実を深く知ってもらおうと意気込み，パワーポイントソフトを使ってのプレゼンテーションにも挑んだ。大人の方にも「なるほど！八田與一という人はそのようなことをされた方だったんだね」と知識を増やしてもらおうというのがねらいであった。学びとギャグを取り入れた学習発表会をめざして，張り切って取り組んだ。

③発表後の経過

保護者の方々はもちろん転勤等で台湾に在住しているので，日本のお母さんお父さんたちよりは台湾のことに詳しい。歴史や活躍した日本人のことについても同様である。だが，学習発表会の後の感想を書いてもらった際，「八田與一がこのような偉業をしていたとは知りませんでした。勉強になりました。」という記述が何通かあった。また，「涙あり笑いありで指導してくださった先生方に敬服いたします。」と，お褒めの言葉もいただいた。そして何より

もうれしかったのは，「子どもたちが生き生きと目を輝かせて主体的に発表している姿に思わず目頭が熱くなりました。」といった子どものありのままの一生懸命な言動に心を動かされたというメッセージが一番多く，そしてまた心が満たされた内容であった。

人々の気持ち，熱い心がいつの世でも大事を成し遂げているのだということを子どもと共に学ぶことができた。